

## 書 評

山本博之、『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会、2006、vi+369p.

### I 本書の構成

本書は、東京大学大学院総合文化研究科に提出した博士論文「英領北ボルネオ（サバ）における民族形成」に若干の修正を施したものである。民族に関する理論書や、サバ、マレーシアの様々な文献、新聞、資・史料を渉猟したばかりでなく、多くの関係者、当事者からも聴き取りを行った上で著わされた力作である。戦後から独立（マレーシア加盟）に至る脱植民地過程において、サバの諸勢力が、外部からもたらされたナショナリズムや民族アイデンティティをどう発展させて「民族」を形成したかを、自ら設定した枠組みに基づいて詳細に辿っている。構成は以下の通りである。

第Ⅰ部；学説史の整理、ナショナリズムの定義（「自立主義」＝他者からの解放、「区切り主義」＝アイデンティティの確立、に分けて捉える）のあと、サバにおいて民族概念がどう把握されどのように発展したかを論じている。

第Ⅱ部；サバ・ネイション（サバ民族）概念の形成過程を、ドナルド・ステファン（後の州首相。カダザン社会の指導者でもあった）とK.バリ（マラヤ生まれのイスラム教徒。華人の父とタイ人の母を持つ）に焦点を当てて検討している。前者は英語による統合を、後者はマレー語による統合を目指していた。

第Ⅲ部；ステファンとK.バリの呼びかけに対して、両者の意図に必ずしも沿わない形で、プナンパン・カダザン人指導者（英語・キリスト教文明を担うと自任）、ブルネイ・マレー人指導者（マレー語・イスラム教文明を担うと自任）、バジャウ人指導者（北ボルネオの多数派としてブルネイ・マレー人の指導に反発）、華人指導者（植民地における政策決定に影響力を行使するため、華人、サバという枠組みを取り入れ）という勢力に分れて実際の運動

は展開し、統合されたサバ・ネイションは実現しなかった。高文明の担い手が外部のより高い文明の優位を解消するために、サバという枠組みに意味が与えられた。外部勢力たるブルネイ・マレー人指導者勢力はその枠組みから外れバジャウ人指導者にムスリム勢力の指導権を譲ったが、後のマラヤとの連合の礎を作った。

第Ⅳ部；マレーシア加盟に伴う政党結成と選挙を通じて、多元主義原理に基づく政党が崩壊してカダザン人、ムスリム／マレー人、華人という3つの民族の枠組みができ、3政党の連合体であるサバ連盟が政権の座についた。

結論；以上を整理したうえで、この枠組みが今後変化する可能性に言及している。

### II 本書の意義

日本における初の本格的なサバ現代政治史研究といつてよい。そもそも、単純に北ボルネオの古名くらいにしか思われていなかった Sabah という呼称にどのような歴史があったかがこれほど詳しく示されたのは、日本では初めてだろう。ドゥスンとカダザンにどのような違いがあるかも、本書でよく理解できる。カダザン社会の指導者で州首相在任中に飛行機事故で不慮の死を遂げたステファンについては、父がオーストラリア人、母がカダザン人程度しか知られていなかったが、父自身がオーストラリア人の父とそのカダザン人の現地妻との間に生まれた混血児で白人社会からは排除されていた人物であり、母も白人の父とサンダカン在住の日本人の母との間に生まれた混血児だったことが明らかにされている。インドネシアの民族運動の草創期においてオランダ人とインドネシア人との混血児が、マラヤの戦後初期の穏健左派組織・マラヤ民主同盟 MDU の中でユーラシアンが、それぞれ反植民地運動の重要な役割を果たしたことが想起される。サバ民族創成に大きな役割を果たしたもう1人の人物、K.バリについては、日本ではほとんど知られていなかった。クランタンの生地にもまで赴いてその足取りを詳細に追った本書は、サバ、マレーシア研究のみならず、華人研究にも大きな貢献を果たすものである。

サバにおいて支配者たるイギリス人が「民族」をどのように分類しようとしたか、その分類が「脱植

民地化」の過程で、どのような内外の（特にサバ社会内部の）政治力学によって変容を受け、最終的になぜ3つの枠組みに収斂したかが、詳細に跡付けられており、サバ社会理解のみならず、他の多民族社会分析にも貴重な示唆を与えている。ステファン、バリらによって血統にとらわれない「サバ民族」創出の運動が幅広く展開されたこと、しかしそれは結局失敗に終わり、マラヤに倣う形で「3つの枠組」が成立したこと、の分析から、我々は、サバではマレー半島と異なって多民族政党による州政権獲得の基盤が存在すること、しかしそれは必ずしも連邦政府の切り崩しに耐える強靱さを持たないこと、を理解できる。つまり本書は、今日のサバ政治を理解する上でも貴重な鍵を提供しているのである。

### III 本書の問題点、疑問点

1. 問題点というより、さらに解明を進めて欲しい点をまず挙げたい。「サバ民族」が実現せず代って3つの民族の枠組が形成された背景は、よく理解できた。しかし、次のような疑問が依然として残る。
  - (1) 「カダザン」の中に含まれる Murut はこの分類をどう考えているのだろうか。「ムスリム／マレー」という呼称を、実質上この集団を率いるバジャウはどうみなしたのだろうか。
  - (2) スルック人・ムスタファがバジャウ人指導者として受け容れられたとすれば、スルックとバジャウとはカダザンとドゥスンのような近似性がありそうだが、p. 52 の「民族分類概念図」では「バジャウ」と「スルー人」（2000年国勢調査では Sulu/Suluk となっているから、Suluk とほぼ同義なのだろう）とはかけ離れた位置に置かれている。ムスタファ亡き後、バジャウとスルックの関係はどうなっているのだろうか。
  - (3) 上記の「概念図」では、ビサヤ人、カダヤン人、スンガイ人は「先住ボルネオ諸族」（上記の民族分類では「カダザン」）、ムスリム原住民（同「ムスリム／マレー」）双方の円の中に入っている。これら3「民族」は、通常どちらに所属することになったのだろうか。
  - (4) マラヤ（マレー半島）では、インドネシアからの移民は、ジャワ人にせよミナンカバウ人にせよ

ブギス人にせよ、「マレー人」に分類される。サバの各民族は、マレー人を除いてそのままのようだ。なぜサバ諸民族とマレー人との間の溝はマレー人とインドネシア諸民族（東スマトラの狭義のマレー人は論外として）との間の溝よりも深いのか、についても教示していただけたらと思う。

- (5) マレーシア加盟交渉でサバに広範な自治権を認めたのはステファンに交渉力があつたためだと述べている（p. 264）が、ほぼ同様な自治権を認めたサラワクの場合はどうだったのだろうか。また、1971年にステファンがイスラム教に改宗した背景や、カダザン人社会、モスレム／マレー社会がそれをどう受け止めたかについても、簡単に触れて欲しかった。
- (6) 「カダザン人会」「カダザン人協会」が並存しているが、これは単に地方によって名称が異なつたに過ぎず同じ系列の組織だったのだろうか。
- (7) 俗にカダザン／ドゥスンは中国人との混血だ、とよく言われる。顔つきは確かによく似ている。カダザン指導者の中に Tan Ping Hing（p. 164）とか Yapp（pp. 164, 289）とか Ng Seng Long（p. 289）がいたとなると、かなりの真実味を帯びる。この点についても多少触れて欲しかった。
2. 華人の「アイデンティティ」についての立論（pp. 254-256）には異論がある。著者は、「どのような枠組で自分の存在が最もよく保証されるか」という観点から見べきだとして、「枠組は常に複数存在し」ているのであって、中国から居住国への帰属意識の移行説は誤りだと断じている。ある意味では事実であろう。しかし、これでは時代による状況の転換を的確に捉えることができない。「脱植民地化」の時代には、植民地当局、イギリス本国政府（とりわけ英国臣民の身分を認められた者にとっては）、地元の伝統的統治機構、中国と、「存在」の「保証」を求める対象（つまり帰属意識の対象）は少なくとも4つあったろう。しかし、現在はどうだろうか。マレーシア連邦政府かサバ州政府以外はせいぜい移住先の政府が考えられるだけである。中国もイギリスも対象から消えている。北京向けにせよ台湾向けにせよ中国支援の「愛国運動」などあり得ない。この変容をどう解釈するのだろうか。また、「中華文化」

の維持は「サバ・ネイションの一部」になることと矛盾しないことをもって、中国とのつながりと現地指向とは相容れないものでないことの証明としている。当然のことである。近年、どの国でも華人社会における中華文化の復興が著しい。これが中国指向の復活だなどとは誰も言うておらず、有効な反証とはなり得ない。

3. 著者は、ステファン、K.バリのサバ民族創出の努力とその失敗の経緯を熱っぽく語っている。しかし翻って考えてみれば、世界を見回して、有史以来の単一民族国家は別として、1国1民族という「民族」が実現した例があるだろうか。独立に際して謳われた「インドネシア民族」がその例のように言われるが、華人やインド人は実質上ここから排除されており、いわばグリブミだけの統合だった。ステファンもバリもある意味で外来者（著者によれば「文化的混血者」）だったからこそこのような認識を持ちそれを推進し得たのではないか。両者が「社会から排除されず、それどころか大きな影響力を持つことが出来た」（pp. 15, 16）側面は大きいけれども、最終的にはサバ諸族は両者の理念を拒否した。歴史的に形成された民族（民族という意識はなかったろうが、同属・仲間意識はあったろう）の方が堅固だったことになる。とすれば、そもそもカダザン、バジャウなど主要民族がどのようにして形成されたのか、諸族の間には具体的にどのような利害対立があったのか、などについてももう少し詳しく触れて欲しかった。3つの枠組内部の分析は詳細に行われているけれども、横の関係についてはやや疎かにされている嫌いがあるからである。

以下では、やや仔細にわたり過ぎる嫌いがあるが、事実誤認と思われる点等を指摘させていただきたい。

4. Parti Kebangsaan Melayu Malaya について、「英語名が Malay Nationalist Party であることから、日本語文献ではマレー国民党とするものもあるが、PKMM においてはムラユおよび民族（クバンサアン）が重要な概念であり……」として「ムラユ民族党」と訳しているが（pp. 53, 65）、同時代の華字紙とマラヤ共産党（マ共）華語文献は一

貫して「馬來国民党」の語を充てている。ムラユの華語訳「馬來由」も用いていない。マレー人の政党である同党と華人、インド人左派とが提唱したムラユ民族概念は、この党の名称とは関係ないのである。ただ、最近のマ共関係者の回想記は、変更の理由に触れることなく「馬來民族党」としているものが多く、中には両名称を併記しているものもある。いずれにしても、こうした名称については筆者の理念に基づいて創造するのではなく、歴史的な事実も踏まえて欲しい。

5. マ共は1947年11月までに武装闘争路線に転換し、48年5月に同党は非合法化された、と述べている（p. 55）が、武装闘争路線への転換は48年2～3月、非合法化は非常事態宣言（48年半ば）後の7月23日である。
6. 46, 47年ころ、マ共は「マラヤン」を嫌うマレー人に配慮して Malayan Communist Party (MCP) から Communist Party of Malaya (CPM) に英語名を変更した、と述べている（p. 61）が、MCP はその後も広く使われていた。CPM としたのは、1970年代初頭に同党が分裂し分派が1983年に「マレーシア共産党」（Malaysian Communist Party）を樹立した際、違いを明確化するためにとった措置だ、との説もある [Chin and Karl 2004: 370, 377]。
7. 人民行動党以前のシンガポールでは「歴代の政権党が政権獲得のために親共勢力から支持を取り付けることが不可欠だったが、政権維持の過程で党内の親共勢力を切り捨て」と述べている（p. 265）が、親共勢力を意図的に党内に入れたのは人民行動党が最初だったはずである。
8. 1959年に『亜庇商報』が、中国から新聞人・鐘永珞を招請して「親中国色と反共色」を強めた、と述べている（p. 238）が、「親中国」と「反共」とは矛盾する。注記（p. 256）では鐘永珞は「かつて広州と海口で『中央日報』の編集に携わり」とあるが、同紙は国民党紙であり、鐘は同紙の台湾撤退とともに台湾に渡っていた [梅州僑郷月報 2004]。つまり鐘は大陸中国でなく台湾から来たのであって、親中華民國、反共の立場だったのである。
9. 巻末の人名索引、事項索引は、「ステファン」

が70ページまでしかなく、「K.バリ」も3カ所しか示されていないし、「カダザン人」は1カ所、「サバ」は2カ所しかないなど、欠陥が多く、ほとんど用をなさない。

10. 埒外のことで恐縮だが、日本語表現で気になったところを2, 3 挙げたい。「表出」の語が頻出するが、どうも日本語としてしっくりしない。大抵の箇所は「表明」の方がなじむ。「……としてみなす」、支持（忠誠心）「調達」（p. 175 など）、「……すべきなのは」、「じきに」（「直ちに」、「間もなく」の意）、言語・芸術・文化を「祭り上げる」（p. 113）（「奉戴」もしくは「発揚」の意か）なども適切さを欠くように思われる。

（原 不二夫・南山大学外国語学部アジア学科）

#### 参 考 文 献

- Chin C.C.; and Karl, Hack, eds. 2004. *Dialogues with Chin Peng: New Light on the Malayan Communist Party*. Singapore: Singapore University Press.  
『梅州僑郷月報』. 2004年第3期. (<http://www.qxyb.meizhou.net/200403/rwyx01.htm> より). 2007年9月18日検索).

Vladimir Braginsky. *The Heritage of Traditional Malay Literature: A Historical Survey of Genres, Writings, and Literary Views*. Leiden: KITLV Press, 2005, 889p.

The publication of Vladimir Braginsky's *The Heritage of Traditional Malay Literature* is a seismic event in Malay literature studies; it may be the single most important text now available on this genre of literature produced anywhere in the world. Braginsky has spent his life translating and interpreting numerous examples of Malay classical texts, and it shows in this volume. The book is more than 850 pages long and on this density alone it screams to be recognized as a landmark of compilation. Yet the volume is also much more than this, as it manages to traverse the centuries and a huge geography of the Malay World lightly and with a nimble touch. This is

not just the work of a master accumulator, but also the many-years-long labor of love of a sensitive intellect. The Malay texts discussed span seven hundred years of time and pass from Aceh to Eastern Indonesia, from the Southeast Asian mainland to southernmost Java. In the end, this book sets a new benchmark for the study of Malay literature, one that is not destined to be surpassed anytime soon. If that sounds definitive, it was meant to be expressed as such.

Braginsky starts off with a useful discussion on the idea of a canon in Malay literature, and how commentaries and the texts themselves act in union to decide what is considered to be foundational to Malay literature, what isn't, and what may be crossing from one category to the next before our very eyes. He gazes over some of the most important early texts of this region, such as the *Sejarah Melayu* (or Malay Annals) and the *Hikayat Raja Pasai* (Annals of the Pasai Kings), and introduces the earliest worlds of Malay writing to the readers through such classical discourses. From here Braginsky moves onto Sanskrit epics that were phased into Malay literature through the exploits of their heroes, and he allows us to see some of this marriage through particular characters such as the Pandawas, and even through the romances of the Panji tales. He even strays into tales of Middle Eastern origin in this early period as well, discussing the place of Iskandar Zulkarnain ("Alexander the Two-Horned") and the Tale of Muhammad Hanifiyah. The fertilization of Malay literature with ideas, characters and images from a number of sources is laid out in full detail, so that we can see "Malay literature" is in fact a spring with many sources.

From here, Braginsky moves into more theorized territory; he spends a number of pages talking about the notion of the "beautiful," from its origins in Malay literature to "immanent properties" of the concept, to the psychology and perception of beauty in Malay writing, as well as the functions of the notion in classical texts of the region. He is interested in these manifestations across the Hindu-Malay synthesis of

classical texts, and especially in tracing what was borrowed and what was rejected by Malay writers, who faced an increasingly complex series of options in narrating new forms of their own tales. Braginsky seems to have a special affinity for adventure narratives (*hikayat*), which were often romantic and allegorical at the same time. He is also interested in notions of spiritual perfection as expressed through literature, examining this through the Qur'an, the *kitab*, hagiographic *hikayat*, and through Sufi literature. The range of expressing one's self in Malay writing was increasing all of the time. Braginsky keeps up with this deepening of choices by outlining how the morphology of Malay literature undulated and expanded to accommodate more and more forms as the centuries passed.

The only real critique I have of this otherwise excellent volume is the Conclusion. It seems slightly short and schematic at three pages, and when so much ink has been spilled on so many topics elsewhere, I suppose one feels a bit let down not to see a grand summing up here, since the number of people in the world with Braginsky's knowledge about Malay literature can literally be found on the fingers of one hand. Perhaps this was intended, though, in the best European philological tradition: it is the book itself that is the summing up, and the author may well have wished for only those brave enough to really push through its many hundreds of pages to see the full arc of his knowledge on display. I do not know the answer to this riddle, but those wishing for a teaching

primer of a few pages on "What is Malay literature" will have to look elsewhere. There may be poetic justice in this, perhaps, and possibly even the whiff of intent on the part of the author.

Braginsky's range is truly amazing. He is equally at home in discussing the Sufi prose of Aceh in the seventeenth century as he is in outlining the contributions of celebrated figures such as Abd as-Samad of Palembang in the late eighteenth and early nineteenth centuries, as well as the famed "School of Riau." But one senses that his true heart resides with the poets; those who constructed dozens upon dozens of poems about "the boat" (that most ubiquitous of Malay objects), or about the conversations of birds, and what they might be saying to one another. In his commentary about the *Hikayat Bayan Budiman* (The Tale of the Wise Parrot) one can almost imagine Braginsky smiling as he wrote on this wonderful topic. Malay authors were nothing if not allegorical, and it is difficult not to imagine with pleasure the thought of a number of Malay scribes sitting around a fire and discussing this notion of the "words of birds" with an earnestness that twenty-first century humans will never know. A good reason to read this book, certainly — but only one in a huge compendium of good reasons. This volume will very surely stand the test of time as a singular masterpiece in its field of study. (Eric Tagliacozzo • Cornell University; CSEAS Visiting Research Fellow from August 2007 through January 2008)